

## 協伸商会穀物レポート [KKR] Vol. 079

(2024/25年度 USDA米国農務省 2月11日発表)

## ① 「トランプ2.0」の関税施策によって農産物市場と価格動向に大きな変動が発生する懸念が大きい

いよいよ1月20日からトランプの第二期政権が発足し、政治/経済/通商等の分野で次々と新しい政策を打ち出し農産物市場には大きな波乱を呼び起こす可能性がある。最大の混乱要因になるのは2,800億ドル余りの最大の貿易赤字国中国との貿易交渉である。「トランプ1.0」の時は2018-19年にかけて第1弾から4弾にかけて自動車/原油/大豆等の農産物を中心に際限のない報復関税の応酬となり、農産物に関しては結果的に中国のブラジル大豆/とうもろこし等へのシフトを促進し、米国の競争力を低下させることとなった。今度の「トランプ2.0」では世界的な農産物交易や市場形成にどんな影響を及ぼすのか衆目が固唾を飲んで見守っている。

## ② 米国産大豆はバイオディーゼルの大豆搾油増産を志向、結果として大豆輸出は減少、大豆粕の輸出量が増大の可能性！

米国の今年度の大豆生産/国内消費/輸出量見通しは119/69/50百万トであるが、これを昨年113/62/46、一昨年116/61/54百万トと比較すると生産⇒微増、国内消費量(搾油量)⇒漸増、輸出⇒漸減という構図が読み取れる。要するに米国産大豆は輸出よりもバイオディーゼルの為の国内消費に動いていると言える。実際米国ではRD(再生可能ディーゼル)やSAF(再生可能航空燃料)向けの大豆搾油工場新設(12工場)増設(4工場)ブームが起きており2027年には現在の約2倍となる約8.8百万トの大豆油がRD/SAF向けに供給される見通しである。昨年の米国大豆圧搾量は62百万ト/大豆油生産量12百万ト/大豆粕発生量49百万ト/粕輸出量15百万トであるが、大豆油生産量は中国(18百万ト)に迫り、大豆粕輸出量はアルゼンチン(25百万ト)ブラジル(23百万ト)を将来的に上回る可能性がある。2027年のバイオ向け大豆油生産量が8.8百万ト(現状の倍)とすれば、+4.4百万トの大豆油生産には大豆搾油量を約22百万ト増加させる必要があり、その時の大豆粕生産量は67百万ト、国内消費が同一とすれば輸出量は倍増の33百万トまで拡大する必要があるが…。

## ③ ロシア産小麦生産量とその輸出量は昨年より大幅に減少、その結果従来の主要小麦輸出国は輸入先の変更の動きも…

今年度のロシア産小麦生産/輸出量見通しは需給表荷もある通り82/46百万トと其々前年実績92/56百万ト比1千万トの大幅減少となっている。今年の減産は主に春先の低温による霜害が原因であるが、一度拡大した小麦輸出の勢いは止まらず昨年7-12月の小麦輸出量は2,940万トと前年度記録2,770万トを上回る結果となり国内在庫がは前年比25%の減少している。その結果、国内供給の維持とインフレ抑制の為この2月から小麦輸出量を削減しロシアの主要輸出国であったエジプト/トルコ/パングラなどはアルゼンチン/豪州/EU等の他の輸出国に輸入先を切り替える動きが出て来ている。

## 1. 世界穀物需給の概要(大豆除く)

① 生産量:	2,819百万ト (前年比0.0%)	⇒	前月比0.1%	減 ↓
② 消費量:	2,856百万ト (前年比1.3%)	増 ↑	前月比0.0%	⇒
③ 貿易量:	493百万ト (前年比4.3%)	減 ↓	前月比1.4%	減 ↓

## 2. 小麦

① 生産量:	794百万ト (前年比0.3%)	増 ↑	前月比0.1%	増 ↑
② 消費量:	804百万ト (前年比0.7%)	増 ↑	前月比0.2%	増 ↑
③ 輸出量:	209百万ト (前年比5.5%)	減 ↓	前月比1.4%	減 ↓
④ 在庫量:	258百万ト (前年比3.7%)	減 ↓	前月比0.5%	減 ↓
⑤ 価格:	\$5.83/Bu (前年\$6.00/Bu / 前月\$5.29/Bu)			と前月比\$0.54 上昇。
⑥ 概況:	小麦生産量は全体的には毎年変動の大きい豪州/カナダが35百万ト前後で安定しており前年より微増の8億ト近くを達成しそうである。消費量は8億トを超え堅調。輸出量は前年より約2千万ト減少するが2億トの大口は維持する見通し。期末在庫は消費が生産を上回り前年比9百万ト減少するが在庫率は32%を維持。市場価格は需給が縮まったこと等から6%近くまで上昇した。			

## 3. とうもろこし

① 生産量:	1,212百万ト (前年比1.4%)	減 ↓	前月比0.2%	減 ↓
② 消費量:	1,238百万ト (前年比1.5%)	増 ↑	前月比0.0%	⇒
③ 輸出量:	189百万ト (前年比2.1%)	減 ↓	前月比1.1%	減 ↓
④ 在庫量:	290百万ト (前年比8.1%)	減 ↓	前月比1.0%	減 ↓
⑤ 価格:	\$4.88/Bu (前年\$4.43/Bu / 前月\$4.51/Bu)			と前月比\$0.37 上昇。
⑥ 概況:	とうもろこし生産量は南米ブラジル/アルゼンチンが高温乾燥から減産となったことから前月比微減、前年比では米国の単収減もあり18百万ト減産する見通し。消費量は堅調で逆に前年比約2千万ト増となり期末在庫量は前年比27百万ト減の290百万トと3億トを割り込み期末在庫率は23.5%まで低下した。市場価格はこの状況を受け37セント反発し\$5近辺まで上昇した。			

## 4. 大豆

① 生産量:	421百万ト (前年比6.5%)	増 ↑	前月比0.8%	減 ↓
② 消費量:	406百万ト (前年比5.7%)	増 ↑	前月比0.2%	増 ↑
③ 輸出量:	182百万ト (前年比2.5%)	増 ↑	前月比0.0%	⇒
④ 在庫量:	124百万ト (前年比10.5%)	増 ↑	前月比3.1%	減 ↓
⑤ 価格:	\$10.50/Bu (前年\$11.89/Bu / 前月\$9.81/Bu)			と前月比\$0.69 上昇。
⑥ 概況:	大豆生産量はアルゼンチンの高温乾燥等の影響で前月比約4百万ト減少したが、ブラジル増産もあり前年比約26百万トの大幅増産見通し。消費量も増加し4億トを超え輸出量も伸びているが生産量の伸びには追いつかず期末在庫量は前年比12百万ト増の1.2億ト/在庫率31%とかなり重い。しかし、市場価格は南米の気候変動不安もあり久方ぶりに10%台を回復した。			

# 世界の穀物・大豆等の需給

2025年2月18日  
米国農務省発表： 単位100万トン

主要穀物世界の需給								
		生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量		
全穀物	2022/23	2,762	3,562	497	2,770	792		
	2023/24	2,820	3,612	515	2,818	793		
	2024/25	1月	2,820	3,616	500	2,855	761	
	2024/25	2月	2,819	3,612	493	2,856	756	
小麦	2022/23	790	1,064	222	790	274		
	2023/24	791	1,065	221	798	267		
	2024/25	1月	793	1,061	212	802	259	
	2024/25	2月	794	1,061	209	804	258	
粗粒穀物 (とうもろこし等) 注1	2022/23	1,455	1,797	220	1,461	337		
	2023/24	1,507	1,843	237	1,497	346		
	2024/25	1月	1,494	1,843	230	1,523	320	
	2024/25	2月	1,493	1,839	226	1,522	317	
米	2022/23	517	701	55	520	181		
	2023/24	522	703	57	523	179		
	2024/25	1月	533	712	58	530	182	
	2024/25	2月	533	712	58	531	182	
大豆	2022/23	378	471	172	370	101		
	2023/24	395	496	178	384	112		
	2024/25	1月	424	537	182	406	131	
	2024/25	2月	421	533	182	406	127	

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	1月	317.46	1,214.35	183.15	1,238.47	191.41	293.34
	2月	315.81	1,212.47	181.16	1,237.96	189.23	290.31
アメリカ	1月	44.79	377.63	0.64	321.71	62.23	39.12
	2月	44.79	377.63	0.64	321.71	62.23	39.12
アルゼンチン	1月	4.09	51.00	0.01	16.30	36.00	2.79
	2月	3.09	50.00	0.01	14.30	36.00	2.79
ブラジル	1月	8.84	127.00	1.50	87.50	47.00	2.84
	2月	8.84	126.00	1.50	87.50	46.00	2.84
EU	1月	7.29	58.00	19.50	75.70	2.50	6.59
	2月	7.24	58.00	19.50	75.70	2.50	6.54
日本	1月	1.30	0.02	15.30	15.35	0.00	1.27
	2月	1.30	0.02	15.30	15.35	0.00	1.27
中国	1月	211.29	294.92	13.00	313.00	0.02	206.18
	2月	211.29	294.92	10.00	313.00	0.02	203.18
ロシア	1月	0.76	13.25	0.05	10.40	3.30	0.36
	2月	0.76	13.25	0.05	10.40	3.30	0.36
ウクライナ	1月	1.57	26.50	0.02	4.45	23.00	0.64
	2月	1.07	26.50	0.02	4.95	22.00	0.64

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	1月	112.38	424.26	179.24	405.53	181.97	128.37
	2月	112.49	420.76	179.24	406.18	181.98	124.34
アメリカ	1月	9.32	118.84	0.54	68.70	49.67	10.34
	2月	9.32	118.84	0.54	68.70	49.67	10.34
アルゼンチン	1月	24.05	52.00	6.00	48.60	4.50	28.95
	2月	24.05	49.00	6.00	48.60	4.50	25.95
ブラジル	1月	27.97	169.00	0.15	59.10	105.50	32.52
	2月	27.97	169.00	0.15	60.10	105.50	31.52
中国	1月	43.31	20.65	109.00	126.90	0.10	45.96
	2月	43.31	20.65	109.00	126.90	0.10	45.96
EU	1月	1.12	2.85	14.60	16.97	0.30	1.30
	2月	1.12	2.85	14.60	16.97	0.30	1.30

世界的小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	1月	267.47	793.24	208.48	801.89	212.00	258.82
	2月	267.49	793.79	204.81	803.72	208.99	257.56
アメリカ	1月	18.95	53.65	3.54	31.30	23.13	21.71
	2月	18.95	53.65	3.54	31.39	23.13	21.62
アルゼンチン	1月	4.54	17.50	0.01	7.05	11.50	3.50
	2月	4.54	17.70	0.01	7.05	11.50	3.70
オーストラリア	1月	2.91	32.00	0.20	7.50	25.00	2.61
	2月	2.91	32.00	0.20	7.50	25.00	2.61
カナダ	1月	4.62	34.96	0.55	9.60	26.00	4.52
	2月	4.58	34.96	0.55	9.50	26.00	4.59
EU	1月	15.54	121.30	11.50	108.75	29.00	10.59
	2月	15.54	121.30	11.00	109.25	28.00	10.59
中国	1月	134.50	140.10	10.50	151.00	1.00	133.10
	2月	134.50	140.10	8.00	151.00	1.00	130.60
インド	1月	7.50	113.29	0.20	112.24	0.25	8.50
	2月	7.50	113.29	0.20	112.24	0.25	8.50
ロシア	1月	11.69	81.50	0.30	38.25	46.00	9.24
	2月	11.69	81.50	0.30	38.25	45.50	9.74
ウクライナ	1月	0.71	22.90	0.08	6.70	16.00	0.99
	2月	0.71	22.90	0.08	6.90	15.50	1.29

脚注1：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約80%がとうもろこしである。  
脚注2：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：9月～8月。

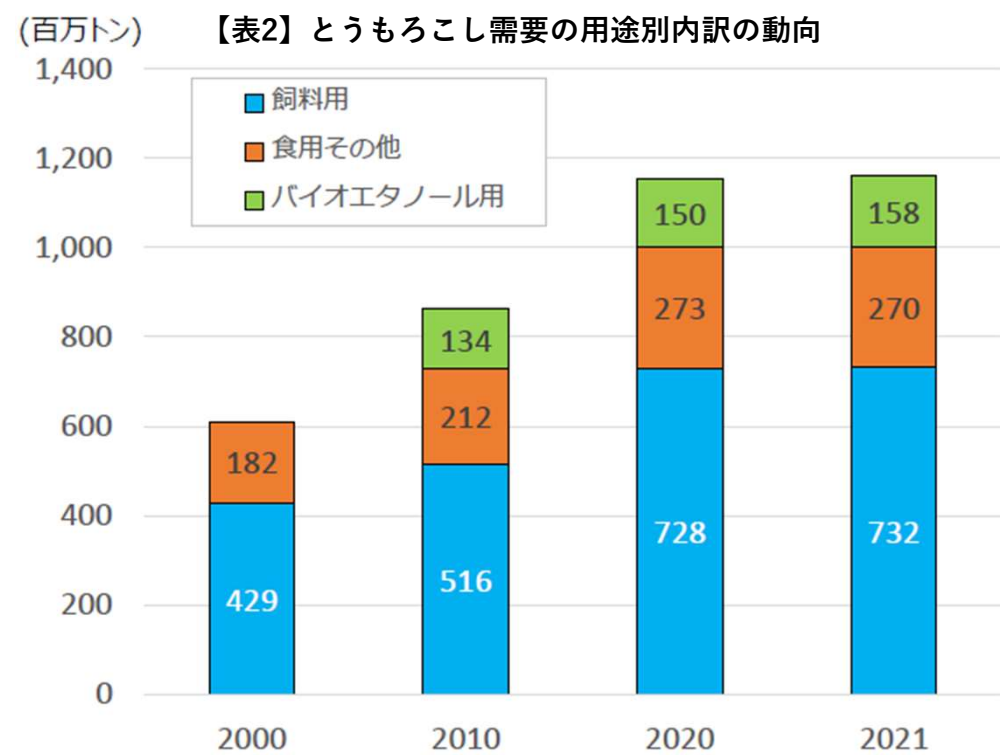
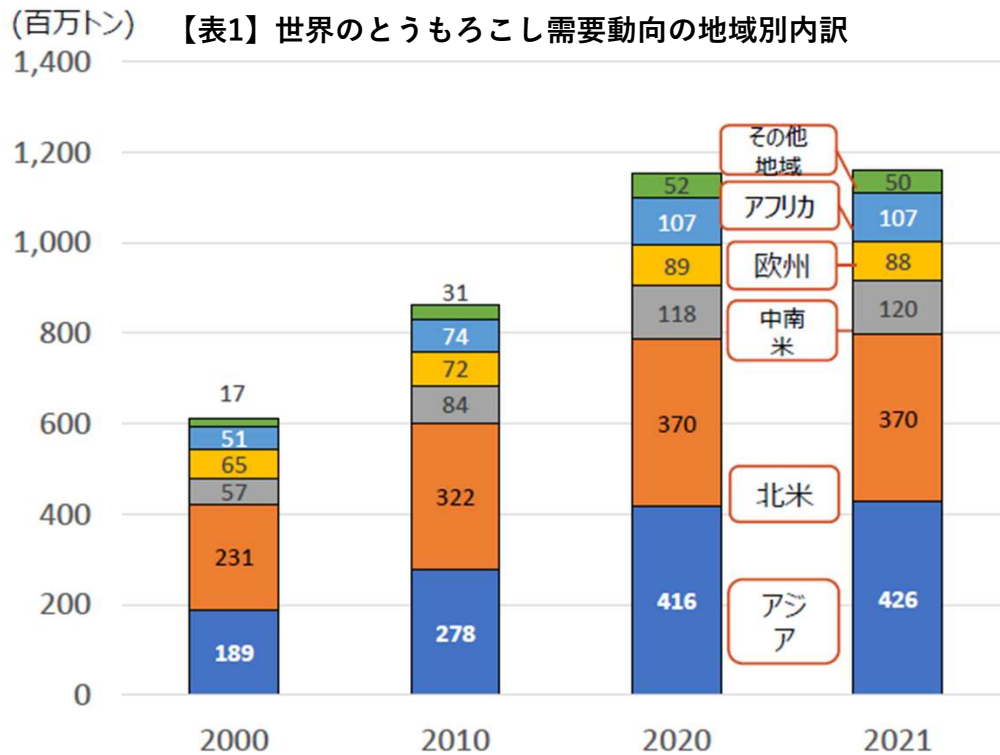
# 世界の穀物輸出を牽引するとうもろこし生産拡大と食肉需要の動向(2)

＜①穀物の海上輸送量は7億トンを超え一般炭に迫る勢い＞…先月号で触れた様に、現在の大豆を含めた穀物生産量は約32億トンと1960年以降の約60年間で約4倍増と歴史上類を見ない拡大を遂げた。それを牽引したのはとうもろこしと大豆の2品目であり、とうもろこしは同期間6倍増の12億トン、大豆は14倍増の4億トンと人口増/食肉需要増/更にバイオ燃料消費増等を背景に急拡大した。その結果、穀物全体の海上輸送量も約7億トン(穀物5.2/大豆1.8/大豆粕0.7億トン)を超え原料炭(3億トン)を上回り、一般炭(10億トン)に迫る勢いである。

＜②とうもろこしの需要は主にアジア/北米で拡大＞…[表1]は、とうもろこしの需要動向を比較的期近な2000年～2021年についてアジア/北米等の地域別に見たものである。この間全体ではその需要量は約6億トン⇒12億トンに倍増。特に「アジア」は1.9億トン⇒4.3億トンと2.4億トン増加し2.3倍となり、この結果アジアのシェアは31%⇒37%と大きく拡大した。また「北米」は2.3⇒3.7億トンと1.4億トン増加し、2地域で約8億トンと全体の約7割近くの消費量を占めるまでに拡大した。また、この間「中南米」「アフリカ」地域が倍増し1億トンを超え全体を底上げしている。

＜③中国のとうもろこし生産/消費量と配合飼料生産の世界シェアは約1/4まで拡大＞…アジア地区の消費増大を国別にみた場合、それを牽引したのは圧倒的に中国の生産と消費拡大である。具体的にその生産/消費量は2000年105/120百万トン⇒23年289/307百万トンとこの20数年で生産/消費量とも約2億トン近く増加し、上記アジア地区増加数量の約8割、同地区消費量の約7割を占め圧倒的な存在である。中国は主食である小麦/コメはほぼ自給しており、とうもろこしの大半は養豚を中心とした配合飼料原料に使用されている。因みに、中国の配合飼料産業は世界TOP 10の中で5社を占めその生産量は2.6億トンと世界生産量12億トンのシェアは約22%と米国(2.3億トン)を凌駕し世界1位である。その中でタイ「CP Group」と並ぶ生産量世界1位の「新希望集団」生産量は28百万トンと、日本全体の生産量24百万トンをも上回りスケールの違いを実感せざるを得ない。

＜④米国のとうもろこし生産増は大半がエタノール用に/ブラジル生産増は食肉生産拡大と輸出用に投入＞…[表2]はとうもろこし需要の用途別内訳を示したものであるが、やはり「飼料用」が約7割増加し7.3億トンと最大の数量を占めその比率は63%と最も高い。次に「食用その他」が約5割増加し2.7億トンとシェア23%。そしてバイオエタノールは2010年前後から急速に増大したが、その利用は殆ど米国に集中しており需要量は1.6億トンのベースに留まっている。この間、米国のとうもろこし生産/消費量は2000年253/197百万トン⇒23年390/322百万トンと生産/消費量とも約1.3億トン増となったが、それは現在の米国のエタノール使用量1.3億トンとほぼ一致している。また、南米は同期間の需要量は57⇒120百万トンとほぼ倍増しているが、その消費の中心であるブラジルは35⇒85百万トン(生産量は39⇒122百万トンと3倍増)とその増加要因の約7割を占め、その大半は米国のエタノールとは対照的にブロイラー等の食肉生産増に伴う配合飼料原料に利用されているが特徴である。(続く)



出所：USDA PS&D Online data 及びUSDA Gain Report